

題目： 表情認知における目および口への注意-事象関連脳電位による検討-

氏名： 小嶋翔大

指導教員： 村田明日香先生（書類上は高橋伸幸先生）

顔や表情は他者とのコミュニケーションに大きな役割を果たす。例えば表情はその人の感情、すなわち、喜んでいるのか、悲しんでいるのかといった情報の手がかりになる。では、我々は他者の顔や表情の、どの部分に注意を向けているのだろうか。湯山 (2015) は事象関連脳電位の成分である P3a と P3b を用いることで、表情認知における受動的注意と能動的注意について検討し、日本人は口の変化と比較して、目の変化に対して自動的に注意が引きつけられる傾向にあることを示した。しかし、2 種類の注意を同時に検討するという実験パラダイムの都合上、能動的注意に関して十分な検証がなされていない可能性がある。また、湯山 (2015) では顔部位の効果ではなく刺激の物理的変化量が注意に影響した可能性も考えられる。そこで本研究では P3b を用いて能動的注意に焦点をあてた実験を行い、物理的変化量の効果を統制するために倒立顔刺激を追加し、正立顔と比較することで顔部位の効果のより詳細な検討を試みた。本研究では線画で作成した真顔の標準刺激とその目または口を変化させて作成した喜び、もしくは悲しみの情動顔である標的刺激からなる 2 刺激オドボール課題を用い、日本人の実験参加者に標的刺激に対するボタン押しを課すことで能動的注意を引き出した。結果として、正立顔では口の変化検出と比較して目の変化検出の処理速度が速いことや、目の変化に対して能動的注意よりも、むしろ受動的注意が大きく向く可能性が示唆された。さらに、倒立顔のように表情の認知が困難 (Thompson, 1980) でより能動的注意が働く場合でも目に対して大きな注意を向けることが示唆された。本研究では日本人を対象とした実験となったが今後の展望としては、欧米の参加者を対象に同様の実験を行い、目の変化と比較して口の変化に大きな注意が向くという結果が出れば、Yuki, William, & Masuda (2007) で示されたような情動の解釈時の文化差だけではなく、表情の変化検出の段階においても文化差が見られることを示唆することができ、情動の解釈と表情の変化検出が対応していることを示すことができるだろう。